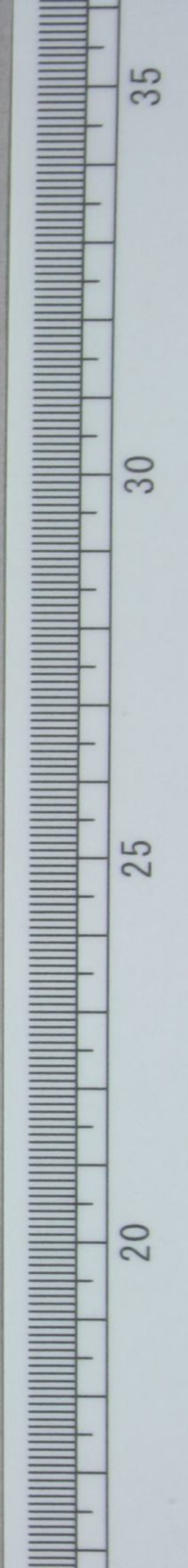


落花情法  
 初篇  
 上  
 春風日記  
 杉村春捕著





舊一ゆきまの移ふる心  
 中ふふて者唯法海の世徳  
 彼梅房の時辰と愛甲  
 心もいふまゝに雲地梅  
 大か車が控便で重なり  
 祈るも角う漢語で初  
 舞の恍惚第まゝに定と

然一勸善懲惡の善  
 心も作者の用心誠の  
 心ねむりし事梅書  
 のまゝに清れ男あが  
 舞一ゆきまの移ふる心  
 誠一ゆきまの移ふる心  
 誠一ゆきまの移ふる心  
 誠一ゆきまの移ふる心

為水書水書





阿波座鳥あせがざがらす 上京かみみやう 芳糸ふゆいと 荻の口あしのくち 志し 何と  
 菘なづな 移うつり せ 春風はるかぜ 日記にじ 滄花そうか と かりの 菘衣なづなえ  
 目も枝めもえだ 疎そ たる 網あみ 暗くら たる 南みなみ 柯か の 夏なつ と 絲いと 也なり  
 一本いっぴん 簾すだれ 武ぶ 菘なづな 移うつり たる 夏なつ と 滄そう 花か の 狂くる 也なり  
 とも江戸えど 中なかつ の 許ゆるぎ の 色いろ を 淫よ して 硯すずり の  
 姉あね と 卷まき たり 鏡かがみ ひが ぐさ きの 暖ぬか け ぞ  
 強つよ くと 巻まき 硯すずり と 祈いのち ふ ぶ ぶ ぶ

柳葉やなぎは 主人しゅじん

ゆりねは  
 海うみ 棠たう の 花はな を さらし  
 春風はるかぜ の 色いろ



落花らくわ 清譚せいだん 春風はるかぜ 日記にじ 初編しゅへん 之一いち

東都とうと 櫻うめ 雨あめ 園えん 戲ぎ 著しやく

第壹章だいいつしやう

此この 花はな の 蕙うい り も 高たか き 浪なみ 速はや 津つ の 春はる と けい へ ど ま ぞ  
 寒さむ き 雪ゆき 間ま の 若わ 菜な 下した 萌も の ち や さ ち 手て 入いれ の 届と き け  
 ん 遠とほ を 網あみ 鳴な の 中なかつ 程ほど 過す ぎ 極ごく の 宮みや 又また 百ひゃく 步ぽ 計か り 心こゝろ の  
 淀よど 川がは け 流なが れ 又また 添そ ひ 風かぜ 雅みやび と 基もと と 結むす 構かま 一ひと 字ご 世よ と 放はな  
 れ 一ひと 構かま え 又また 滑なめ ち ても 志し る き 別べつ 荘しやう 又また 法はふ 頂ちやう 假かり 又また

任唐為る男は二十二三位ひ随分大家の息子株  
忌憚み氣の若き好男子今日も音なく降りつく  
春雨空の境然ぐは書棚と彼方此方かひ探り取  
出し観る物の本通み倦きおぐら川附の樟子と  
見まば人彩のありく罵るゆぶかーさ又思をせ  
勝手の方に向ひおいらく治郎どん庭口又何推か  
お客が有りませと謂ひおがら樟子のうぐ又  
向ひおいら何推かおいらませんがトは方へおいらん

かさいさし只今此家の治郎どんは唐ない板で  
着がまう福なく啼りまあやらゆくと樟子と吹  
けて其人を見より男を驚天し思をせ落す物  
の本さし取りおげて表又行む女の姿をお詠め  
おいら動して遠か遠しひ所を厭ひも仕ないで尋ね  
て号とサ此方へおいらんさかと謂れど女も喜況  
びー笑顔をいとも美しければと常又夏りー面疲  
る雨の物々を風又吹るし流るし一入又増して見

ゆるぎのりひりりき何より旦那が流機煙をお頼  
と見ましてきいひ路と途々尋ねて一念で何  
り嬉しう沙彦いませよ東京でお別れになりま  
して最一年又なりませるか今頃は旦那のお氣  
が變つとくと夫計りりお氣又かゝて未来とや  
らの迷ひの種をよして旦那お主人さんへ矢張  
お一人で居つたあやるので流せり外り子男お一  
人もお一人真の福がサだが朝晩の事かゝ義炊  
の世話ハまさり自己又出来おへかゝ此方の店  
りり洛郎どんとゆふ老爺が孫子の贈いなり察  
審なりで来て居る計りサコヤ何んか噂をつりり  
謂つてお居おさるる傍ら一ひ遠してお逢申さ  
うらも何時までも遠一所にお側は附添つて何  
件の御用と呈し一たら全歡喜ひ事で流彦また  
やら小修又たうおひ男が寧々哀しう流彦も  
ふ門這して廻り遠くかゝみやア此家内みや居

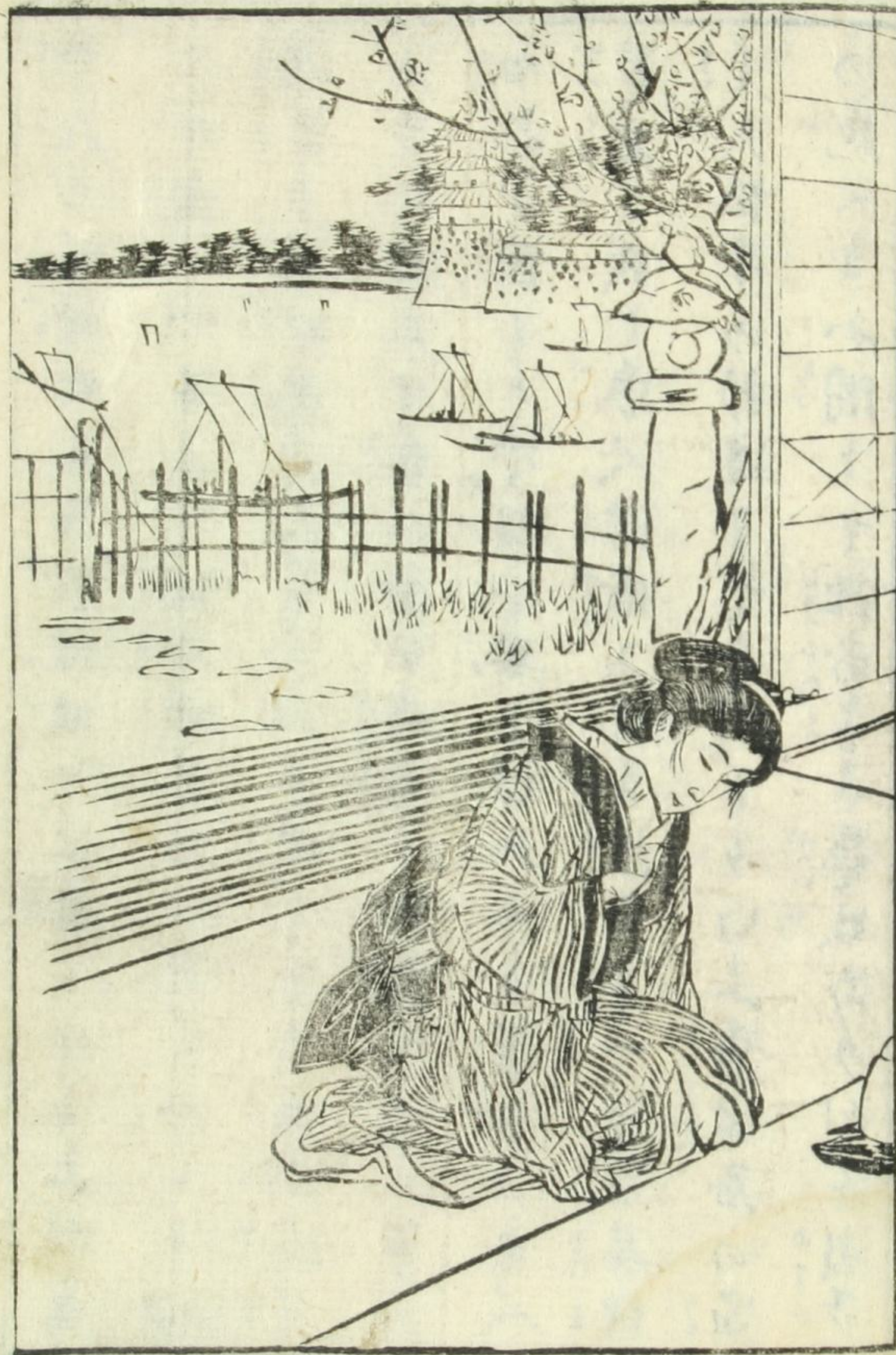


られまがどりの工風と考へ出して大坂に居る  
れ終く迄も兵庫より神戸より小阪帯と持てや  
心取事そわく別々其思ひ思つゝ通り終ひ  
が叶ひりや中うで貴君の御深切を決して志  
で忘れせん誓一日でも持てやれを喜悦ひ  
で沙塵いよ志やうが浮世を放れし思へし思  
ふ小竹のぬ身の因果おきつゝ成つて下さぬ  
しと氣をと念む涙の雨軒乃慈の啼より袖りて

涙を忍び音も男は物よや的りけんコトサお園お  
めへハ動志らんご最前から聞て居りやア思つ  
た一志が属しての未来でどりまゐるのと氣と成  
る辞が度量もあふるよア思つて見わく廻つゝ  
悦ひ再會は不吉を吐くも流して置き自己が東  
京を立てかゝ其弱は今もやどりして居るの  
味しく聞せが喉後二郎や丈助等が居るまゝ氣  
地の悪運もあつゝが居なくあつゝ日あやあめ

の味方も妙しもかき苦迫かなしひ憂目もを遠  
くらうかこ心証と明け暮れ為ぬ間も涙の種  
くマ吐して所せねか可甚お吐くそとゆひさ  
して涙の目元あめやりに暫時言紫も滴漣ぐ垂  
のお舟又あうなく小泣う心と押護め一旦お  
地へお中り此端での事を五存トす心の夫を動  
しと事で志中うま今更お雨し申さなうま君の氣  
程まお心で日番頭さんと文助の両個が仕業と

思ふしお腹が立ちもたまし中うが大旦那の所  
差圖ごとお聞まふして私も身の遇りと節つ  
たり還て旦那のお月上小澤山を事か所うか  
と前後案トて文助の眉ふ又怪せて終つひは  
世と控さ悲しひ吐しと是よりお園がその語り  
も暫く言葉の繁まを省き漢み物語りと書き記  
す諸は網島の別荘小去年四月の頃よりして押  
籠められくる好男子も東京日本橋區おて最も



早も  
少  
来て  
梅  
は  
名

無花の留澤町又号服渡世と名廣くする上州屋  
正兵衛が一子あり佛名提花正三郎といへる人  
情弱き当世息子あり心も堅くして花街遊里  
ふまを踏みせ益の金を許散し放蕩かせし事ハ  
勿れど固より風韻と樂しむおかし有名る文人  
墨客又或は藝人俳優も交際多き一才子其頃  
先大坂界の新道より吉川よりいふ藝者屋の家  
の抱へよ小園として淫水香き藝妓あり引を救多

の其の中又件の小園と正三郎は何町の種ふくの  
思ひと通し院小小園が十七歳正三郎ハ廿一乃  
春抱え玄の吉川何某と掛合て小窓が身の代許  
多此金と遣を根引きと做し靈岸島のうへへ  
園ひ置き折ふあれてハ小園が許く通ひつゝ  
有よと樂しむ内は事父正兵衛が耳入り以て  
の外なる腹立あく高家の者が此時より外妻栞  
とい何ぞくぞ悠る無頼の正三郎は淫者として挿

置て終みと暖簾小倉の附く家名の大車今の内  
可愛さ際る正多ゆらつ微らよ親類の懐めも聞  
ぎ其至年四月廿初旬大坂ふて別家回振かる号  
肢渡世丹浮屋治助が許へ懲りめの為免遣させ  
し小丹後屋少ても本店回振重き得志の若旦那  
と赤代の如く店向より遣ふし何々不都合や  
網島の別荘小滞留させ何不足なく仕送りける  
○是より下の咄し前の辞又續く物語りゆ名甚

心得ふて讀み給ふ強一茲ふまゝと東京靈岸島小  
田に居る小園と此程正三郎が来りざるふ心と  
痛の免やせん角と胸潰れ人と頼みて移子を聞  
んとおり人と善て本店の回輪も堅き家風ゆゑ  
萬一親旦那の目小觸れあを遣つと為れ悪り  
あんと寝食さくも忘るゝと下女のお三が程々  
と愁む辞と力草と今日も淋しく侍ち後門  
の戸明て入り来り男ハ見馴ぬ二個連れ一個

ら店の番頭茂二郎跡の男ハ小園ガ伯父ある丈  
助めく遠度若旦那正三郎さんのお尻ガ割れ惚  
花の店へ付け登せ夫又附て親具形ガ以の外  
の暖主ゆ名は家作諸道具ハ申も疎り手道具は  
でもお店へ引渡さねをたうかい分極せよして  
小園ガ身の上も両親とも小形水ハ羞向き伯父  
の丈助へ引渡せよとの意圖ぞと聞ひく小園ハ  
驚天し餘りの事又言葉も出で泣くお三又暇と

取せ外お寄もなま物から丈助ガ方へ引取り  
ける抑此丈助とゆへ者も小園ガ母の兄外是  
と固より名場ノ悪漢より小園と我家へ引取り  
しより再び藝者又賣らんと思はれど小園ハ正  
三郎の復りを待ち執つて風もあるべしと思ふ  
ものから丈助の言葉と何時も拒みしは程丈  
助ガ妻あり者不供持より大病ゆ名薬治の手當  
何れと金の入目此多り水を蓋々小園又迫り

つ甘くも欺して武大家の隠居して妾を欲する  
者有りいと幸ひよ多分の金を受取り小室と共  
家へ遣りしる去程に愛事終る小室が母の  
患う人々大坂へ下りて候りの河りもせむ使と  
せんよは行先の判然せぬと物とせんさりとて  
此身と稱しては正三郎へ操えよ死にたう告  
しん思ひら還つて思ひぬの人と通せんもの  
女の氣小室居居の方へ来り一日より三度の合  
と後しゆ名房次小身体衰へて起も河あうぞ伏  
き床に消ちんとす有様と陰居と始め女中等  
も醫者よ薬と氣と探みて保養と心と尽せども  
小室の悪て覚悟の病ひ茶を飲みつ死ぬる日を  
治る放棄なき小室が身の上中く書きも尽され  
ぬ讀む人ありれと察し玉へ落しうと小室の覺  
悟の上あうと此終死なは憐れとて小室と立てし  
心の中正三郎へ知しと別れしうりの成りゆ

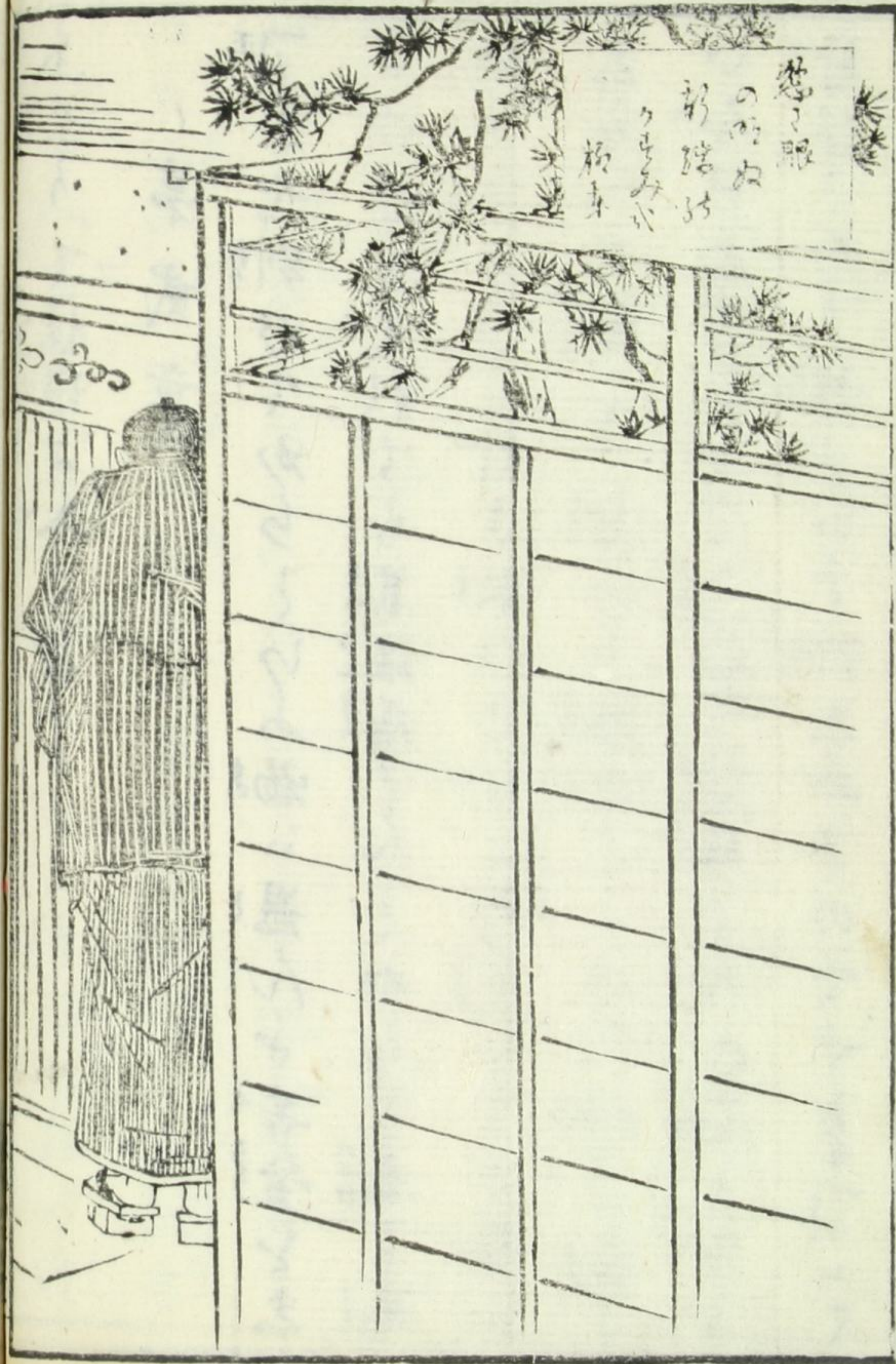
つ甘くも欺して武大家の隠居して妾を欲する  
者有りいと幸ひよ多分の金を受取り小室と共  
家へ遣りしる去程に愛事終る小室が母の  
患う人々大坂へ下りて候りの河りもせむ使と  
せんよは行先の判然せぬと物とせんさりとて  
此身と稱しては正三郎へ操えよ死にたう告  
しん思ひら還つて思ひぬの人と通せんもの  
女の氣小室居居の方へ来り一日より三度の合  
と後しゆ名房次小身体衰へて起も河あうぞ伏  
き床に消ちんとす有様と陰居と始め女中等  
も醫者よ薬と氣と探みて保養と心と尽せども  
小室の悪て覚悟の病ひ茶を飲みつ死ぬる日を  
治る放棄なき小室が身の上中く書きも尽され  
ぬ讀む人ありれと察し玉へ落しうと小室の覺  
悟の上あうと此終死なは憐れとて小室と立てし  
心の中正三郎へ知しと別れしうりの成りゆ

きとゆく細々不書認め吉川屋の抱へあり一時  
いと賤賤敷語りひ一妹藝妓の小露とくへる今  
そ麓町ふく一二と噂する評判その固より實意  
のありと知ればなりのらん後又西三郎へ届け号  
きうと件の文と密に送り送るにける總ては物  
語りも明治元年比八月又始り大阪細島の條下  
りて同二年二月の初めの事なり摘例の小説本  
といひへ事實ふ噂の勢もなき奇語なりは終  
小至りて佳境よ入るぞ！

第貳章

証おや別水りめらとりい物に飛んが苦勞を志  
とつけま支れども其後居さんとやらも高き為  
やうといつゝ引き取つて日よや支り又為も  
あめくが動く事から騒出くくの係りし時  
い分けおやまかおやま支り後居さんの妻と名  
付ひくめら性いとい仰おゆるのですすりしそ





怪しいおや極り切つて居るだらうおやわく  
一晩も泊るわく出さけふけでも無一月  
も三月もつ所小寝泊りとして甘色達ても唯  
置まのおやわく人益傑と別品と例と居え  
幾ら陰居さんでも色氣の有つと抱えわ  
方極思ふのは當然つたや貴君を疑づつ居る  
おやの史志や死んば様とまの毛矢後貴君  
小初れわのらまそ残念い動たら疑るとお

晴りやうき事が出まはずたらう何と謂ふの  
死で様とまとは引死ぬ氣を様とまので貴  
君ふ知しぬる残念ながら再び来まなくお帰りお  
なりと事わく潔白お心の中もおれまおやう  
刺然り明さぬ物お同誓と懸しとと色むと  
まて目小涙替時言葉とまのりけりア史はそれ  
あして置く今宵も此所と陰まても一晩位を寝  
らるも志やうが夜が明たら梅片と付けかく

つちや、あつねくが何と謂ふも切迫を活さぬ  
何れもそんなを、御心配を掛りて、々々濟ません  
そよ、何時まで御側り居りまして、も名残  
違も、そんなから、此際お別れも、あゝまあやう  
かん、と、愛分事とり、よ、違々尋ねて、来、このあ  
直、帰るの、なんの、と、云、が、有、お、わ、と、も、臨、居  
さん、又、湯、給、へ、と、ぞ、も、り、の、事、な、う、播、手、又、為、わ、く  
と、勘、一、怒、意、と、し、た、る、男、の、顔、を、流、め、つ、一、お、後、の、言

のも、所、た、も、て、遠、た、が、帰、る、時、刻、よ、遠、く、り、て、居、る  
ぬ、名、残、と、割、る、思、ひ、証、を、只、分、る、私、の、身、の、上、且  
形、へ、東、あ、く、目、出、度、お、帰、り、み、な、り、ま、し、と、あ、う、者  
川、の、小、露、と、ん、と、可、愛、が、の、て、遠、く、下、さ、ら、ま、し、あ  
の、妓、も、便、り、の、な、ら、身、の、上、で、す、の、う、是、は、此、世、の  
別、れ、と、あ、り、ま、し、て、も、何、の、世、を、思、辨、の、五、葉、思、と  
叶、葉、の、陰、り、う、祈、り、ま、す、す、ア、お、別、れ、ま、し、う、少、く、が、悲、し  
いと、り、よ、と、祈、り、つ、正、三、郎、と、い、つ、う、小、園、あ、め、く、の

謂ふ事ハ實ニ分らねば苦痴としふも程の  
何の動も別にもあつてまはしと構子と  
咽けと出んと為るもど正三郎は警りまはし  
小園は橋を取つてついで少園はちかき云ふこと  
少園はとと驚きと驚きと驚きと驚きと折柄  
次の襖をぬき入り来る治郎爺はまはしと  
さん大層驚鳴て居つてまはしと  
ひ覺えねと正三郎も四方と見えながら胸裡却

ア今の夢だつとの事案する事と爰も見と故  
累ひ吐くも目の當り動り正夢でなければ  
て苦しひく一旦那ハ小園はと苦しむ聲で  
つとやるから起つたんが何れへ亡魂の爰  
でも見ていつつとこのどらう亡魂でも何  
でもねんが顔り小氣く成る夢方あつて号  
もつて直つてつと夫小ね具取泣き流す  
お手紙が先刻届きまはしたか直にお上げ

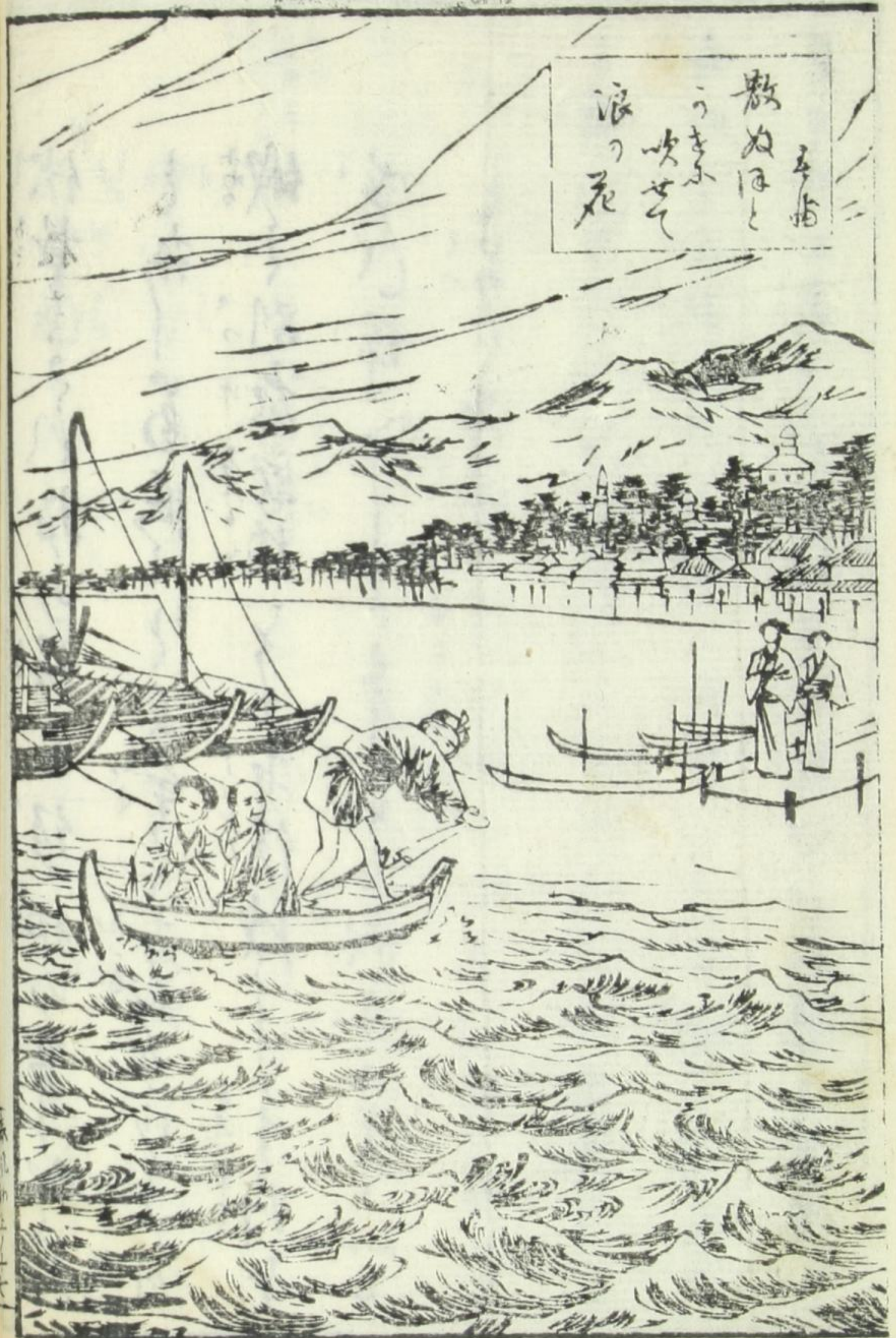
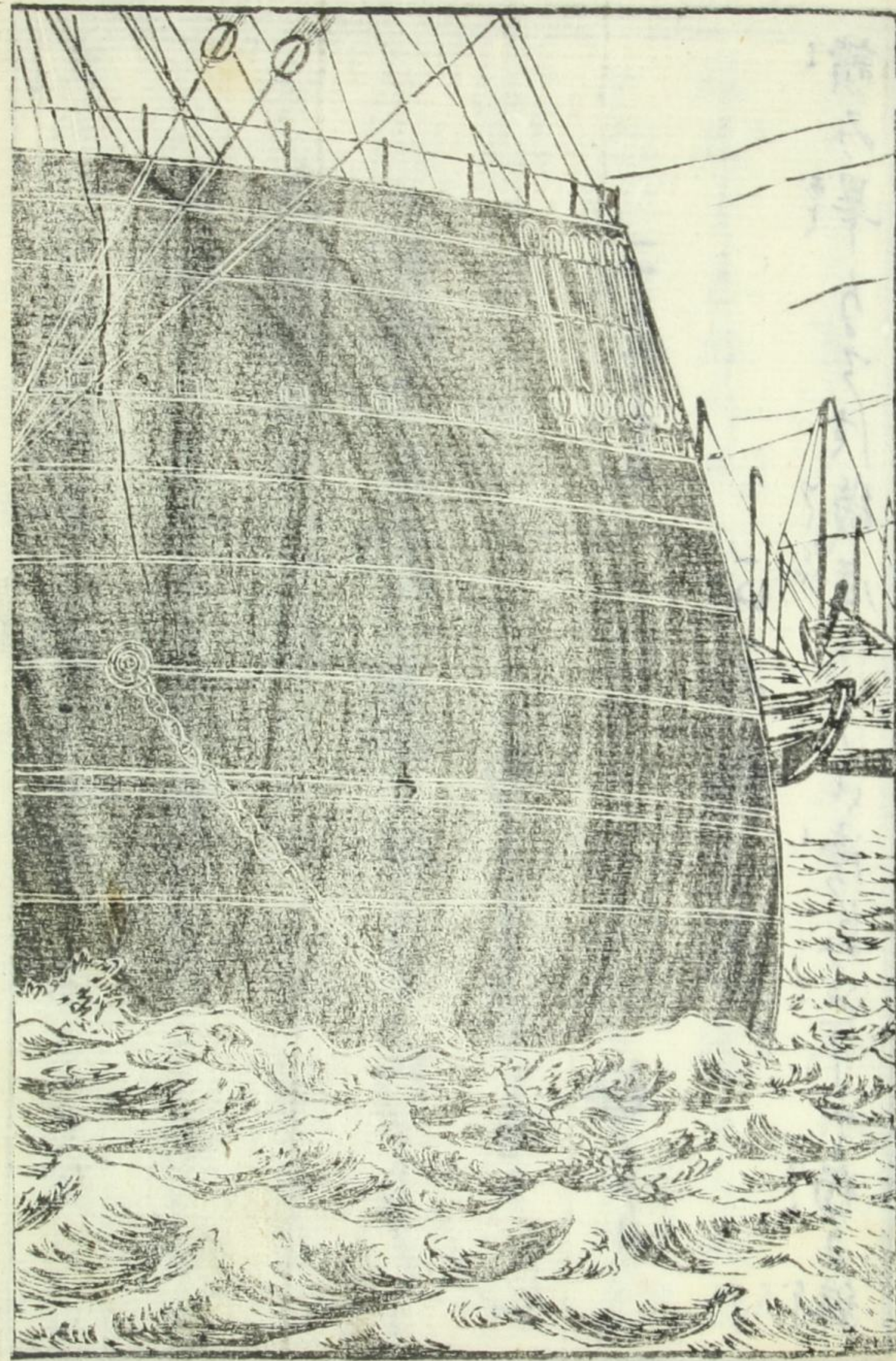
そよと来て見よ〜〜〜能く熟睡て入らつた  
所とお起〜〜〜何ぶかと思ひ〜〜から  
と差出ま紙の上書と讀み下せば西三郎どの  
母より有り〜〜バ直〜〜控小受け取  
減お世話さま治郎どん灯と付て下さぬを  
と様より新焼ふ火と〜〜持出来る也ど  
三郎ハ母の手紙とよみ下さふ

急ぎあぐ〜〜一巻中〜〜法を伴よら

彼もか〜〜のふ業〜〜れ〜〜  
みと思〜〜心〜〜は明〜〜れ〜〜も主伴の  
〜〜り〜〜掛り〜〜面白〜〜い〜〜と  
書〜〜り〜〜さ〜〜り〜〜隠〜〜れ〜〜の爲〜〜に  
それ〜〜も〜〜ゆ〜〜い〜〜つ〜〜ら〜〜い〜〜さ〜〜ま〜〜は  
〜〜び〜〜ん〜〜と〜〜物〜〜は〜〜紙〜〜割〜〜意〜〜の〜〜て〜〜し〜〜人〜〜奉〜〜出〜〜人〜〜の〜〜ま  
〜〜母親の思〜〜召〜〜し〜〜は〜〜何〜〜り〜〜が〜〜さ〜〜ぬ〜〜形〜〜お〜〜あり〜〜と〜〜は  
孝の心〜〜を〜〜お〜〜惜〜〜し〜〜み〜〜も〜〜な〜〜く〜〜お〜〜産〜〜と〜〜し〜〜り〜〜と〜〜降

してやらうと實は満ちたどれくまを  
有り様とまじむり増のま  
よき事なれど父より父より  
初も志の善くかむ奴と必と決し事  
が這度の輝も幾二郎が悪く悪父又  
速ひわく今更謂ふも端の勢り  
おふり中よしの村と見合を  
の中より父と母の清風  
伏松をこれ娘の神を  
とあり為長くと  
お別れお別れともお信  
おび帰し  
もあしゆゆり  
と讀み  
母か母親の  
お愛りがなけ

伏松をこれ娘の神を  
とあり為長くと  
お別れお別れともお信  
おび帰し  
もあしゆゆり  
と讀み  
母か母親の  
お愛りがなけ



浪の  
花  
吹さ  
ぬほ  
と  
五  
指

重るのも皆是我身の誤りから出来し事か

治助さんで中をさされしうら

汚相續のうられくもえやう帰らぬ

とお侍中飛走いお半ばり

め~~~~~

二月十日

母

西三郎どの

読み畢りては幾度うまうは読み返して獨り解

「あうりやう事なつて日あや片時も安閑して

は居るをわく免も所れ治助さん又達とらへ帰

る支度とせんものゝ夫より浄堂前なる丹後屋

治助が定を訪ひ母より来りし手紙をよみし

ん事とものかゝ水は治助も東京よりの手紙と

見せ送る至急あふかれを片時も早く帰らるべ

し幸ひ明日も廻漕社の出船もあれを交り

込みめくらもよといし信切小松宿し其翌朝正



三郎ハ沼田小送くらも神戶へ出で廻漕社の意  
氣船小乗りあまつ日遊ぎあそび小回りうわバ  
母親は病後云えんうたなく父正兵衛が病氣は  
日一日よりも重かりけると今正三郎が帰り来り  
しう、固より可愛き指子ながら共小うらうらぶ老  
の身乃側と放水を正三郎も心と碎く看病も命  
數限りあるものなれまや終つて正三郎ハ二月の  
下旬六十三歳と一期として鬼籍おしりうらバ

一家の歎けさいえもん方なく借あつて金もぬるの  
らざればして形かたちの如く小野邊の送りも果しり  
を正三郎も店向乃商用専ら注意して父の存ぞん在  
ふかきる事なく最難はしく榮えけを徳く正三  
郎ハ折をりさすれ小園おゆと漸と探さんとして心當  
りと身みのみしうが伯父丈助が小園をひき取りた  
まは方今も丈助さくも行さうと知れど如何いかんか  
りしや知る人なけしむが正三郎ハ只管小園も

元と幾者かり浮糸々常の家業中息まゝに能く容  
み躬と任せ何れの里みや任せぬらんと思ひ控  
ても忘られぬ心乃迷ひり夏向けて堵々として  
樂しまず世ふ云ふ神経病の如く見えし母  
の心配お月方なご名所も典米頭小乞ひ瘡居  
かせしませ家効験をわくまゝより店向の輝え  
茂二郎等々但ね金形の意へ保養おごり乃樂座  
居岡目で見しハ羨し其躬ハ物々憂思ひ夏も  
ぞりまれり也

7

中旬と過ぎ行りど焦り身は秋風の吹く夜  
砦の音までも枕よ表と告げ了る堤花の意  
ぞりまれり也

春風日記初編之一終

